

優秀賞(学生部門) 石田 優衣

輝く姿



「緊急！2階検査室で心破裂しんはれつ、すぐに駆けつけるよ！一緒に来て!!」私達はPCPS(経皮的けいひてき心肺補助装置しんぱいほじよそうち)を押しながらエレベーターに駆け込み、病院の廊下を抜けて検査室へと急ぎました。緊張とともに手に汗が滲にじんでいたのを今でも覚えています。私は、臨床工学技士になるために杏林大学に通っています。3年生の後期になると約2ヶ月間の臨床実習が始まります。この中で臨床工学技士を志す気持ちを更に強めた出来事がありました。

私達が検査室に到着すると、既に大勢の医師、看護師が集まっており、交代で心臓マッサージを行っていました。騒然とした部屋の中でモニタのアラームが鳴り響いていました。そこは生と死を分ける戦場のようで、医療従事者は各々の役割で戦っていました。私を連れてきた技士は「隅の方で見学するように。」と告げた後、患者のもとへ向かいました。到着から数分が経過した頃、医師がPCPSを接続

するためのライン作成に取り掛かりました。その間、臨床工学技士は汗だくになりながら、いつも以上に真剣な表情でPCPSをプライミングしていました。準備が終わり、医師と臨床工学技士の手でPCPSが接続されました。するとその瞬間、モニタに変化が現れ、患者が目を開けました。医師が「わかる？」と尋ねると、患者はゆっくりと頷きました。PCPSをつなぐ前は何をしても変化しなかったのが、つないだ瞬間、患者は「生きる世界へと戻ってきたのです。

この出来事を見た瞬間、「この仕事を目指してよかった」と思いました。そしてPCPSなどの医療機器、また、これを扱う臨床工学技士は本当にすごいと思いました。必死にPCPSを準備する、技士の輝く姿は忘れられません。

来年の春、私も臨床工学技士として働くこととなります。これから先、臨床工学技士の業務は拡大し、更に発展した医療機器いりようきが開発されると思います。私も病院実習で出会った技士のような、どんな状態でも冷静に医療機器を扱える、思いやりをもった臨床工学技士になりたいです。

